
～ 碎牙 ～

武泰斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

く 碎牙 く

【Nコード】

N 8 4 4 4 Y

【作者名】

武泰斗

【あらすじ】

魔法と冒険の時代、大国アトモスにある「王立第一魔法学園」でとある少年と少女の再会から物語は動き出す。

人物紹介（前書き）

人物紹介です。随時更新予定

本編で語られないキャラ設定もあります。

ただし、ネタバレ注意

人物紹介

●ゼノ・アルフレイン

物語の主人公

髪の色：灰色

瞳の色：青

適正属性：無し

十歳のときに両親が失踪したため、伯父であるジンに引き取られた。それ以来クローゼ村でそれなりに幸せに過ごしてきた。

幼少時代に周りからいじめを受けていたため、他人を貶める人間が大嫌い。

●サンドラ・ルミール

ヒロイン

髪の色：赤

瞳の色：黒

適正属性：水、樹、雷

ゼノの幼なじみで彼と再会を誓った女の子
幼い頃から魔法を使うことができたために、当時は周りの子供達に避けられていた。

成績優秀で、さらに美人で性格も良いため、友人関係は良好。三種類の適正属性をもつ。

学園では「紅嵐」と呼ばれている。

●ジン・アルフレイン

ゼノの伯父

髪の色：茶色

瞳の色：青

適正属性：火、水

ゼノの育ての親的存在元冒険者で剣術と攻撃魔法が得意、現在はクローゼ村で狩人をしている。

「おじさん」と呼ばれるのが嫌い。たとえ甥っ子にあたるゼノに伯父さんと呼ばれるのも嫌。ちなみに39歳……おじさんじゃん親と村に捨てられたゼノを引き取ったが、それ以来娘がゼノにベツタリなのが悩み

●ミリア・アルフレイン

ゼノの義妹？

髪の色：茶色

瞳の色：翠

適正属性：水

ジンの娘、始めてゼノと会ったときに一目惚れしたらしい。ちなみに当時7歳。もちろんゼノは気付いて無いが……。父親譲りの剣術と母親譲りの治癒術の才能を持っている。

義妹となっているが正確にはいここ。

●ミランダ・アルフレイン

ジンの奥さん

髪の色：水色

瞳の色：翠

適正属性：水、樹

誰にでも優しく料理も出来る美人な万能奥様。ただし、話題が年齢に関するものになると修羅と化す。

村に来たばかりで傷心していたゼノが最初に心を開いた人でもある。ただし、ゼノに自分のことを母さんと呼ばせるのに一年以上か

かった。

●村長

クローゼ村の村長

以上！！

●スズカ・イスルギ

学園の先輩

髪の毛：黒

瞳の色：黒

適正属性：火

東の最果てにある大和出身。とにかくテンションが高い。中等部の2年から第一魔法学園に編入した。一年ほど前から北地区にある喫茶店でバイトをしている。

世話好きで優しい性分だが、テンションの高さのせいで台無しになっている。

カワイイものにめがない。ちなみに一つ下の学年に妹がいる。

プロローグ

「本当に行っちゃうの？」

少女は泣きそうな眼で目の前の少年にたずねた。

「仕方ないよ、俺みたいな役立たずを引き取ってくれる人なんて他にいないからね……」

少年は少し困った顔をしながらそう答えた。

「違うよ！ゼノは役立たずなんかじゃない！村の皆がゼノの良さを理解してないだけだよ！」

「俺の良さ？そんなの存在しないよ、頭も悪いし魔法の才能も無いし、それに何より……」

少年――ゼノは俯きながら呟いた

「あんな最低な親達の息子何だから……」

「……でもそれはゼノのせいなんかじゃ……」

ゼノの両親はつい先日、ある事件を起こして失踪した。

……たった一人、十歳になったばかりのゼノを残して

「それに村の皆が言ってるよ、『お前みたいな落ちこぼれが村に居座ること自体間違いだ』って」

ゼノには魔法の才能が無かった、それどころか、ひとりに最低一つはあるはずの魔法の『適正属性』すら無いため村の同年代の子供達

からいじめを受けていた、また、彼の両親は息子にほとんど興味を示さず彼とまともに会話を交わすことすら無かった。

ただ一人、目の前の幼なじみだけが彼の唯一の味方だった。

「でもゼノが居なくなったら、わたし…」少女は涙を流しながら力無く呟いた

「大丈夫だよ！……サラならきっと俺がいなくてもやっていけるから。」

「でも！」

「サラには魔法の才能がある。だからきっと、他の皆ともすぐに仲良くなれる。……もう俺を庇う必要も無くなるしね。」

ゼノは、俯いて泣いている少女――サラに微笑んだ

「俺さ、向こうに行ったらおじさんに剣術を習ってみることにしたんだ。」

「？」

「だから約束するよ！次に会うまでに絶対に強い剣士に成るからさ、楽しみにしててよ！…ね？」

「グス………わかった。でももう1つ約束して…」
サラは涙を拭いながら言った

「絶対に…絶対にいつかわたしに会いに来て。」

ゼノは笑顔でそれに頷いた。

「小僧、そろそろ時間だ。」「…はい、わかりました。それじゃまたねサラ…」

「またねゼノ…」

ゼノはサラと最後に微笑みながら別れの挨拶を交わし、魔動車に乗り込んだ

「挨拶はすんだか？」

運転席で男が尋ねた

「うん」

「じゃあ行くぞ」

走り去っていく魔動車をサラはいつまでも眺めていた

「ねえおじさん「おじさんじゃねえ！お兄さんだ！」……………ゴメン。お兄さん」

「なんだ？」

「向こうには何日ぐらいに着くの？」

「…だいたい三日ぐらいだ。」

「そっか、遠いね…」

「だからよお、いつまでもそんなひでえ顔されたらこっちが参っちまうからよ、いまのうちに泣いておけ。」

「!.....グス、うわああああああ!!!!」

ゼノの悲鳴のような泣き声が草原に響き渡った。

1話 五年後（前書き）

初投稿の作品なので、へたくそな文ですがよろしくお願いします。

1話 五年後

Side:ゼノ

「うん…。」

朝か、なんだか懐かしい夢を見た気がする。故郷の「ハング村」を旅立ったときの夢か…

もうあの日から五年も経過したのか、はやいもんだ、あれっきり幼なじみのサンドラとは一度も会ってない。

「まあ、俺のことなんてもう忘れているかもな…。」
それに気まずいんだよなあ、あのときの約束破っちゃったし

「ゼノ……！朝ご飯できたからそろそろ起きなさい」

下から母さんの声が聞こえた、そろそろ起きよう

リビングにおりたら見知った茶髪の男性が声をかけてきた

「おう！起きたかゼノ」

「おはようおじ「ああん！」…父さん」

この人は「ジン・アルフレイン」五年前に俺を唯一引き取ってくれた人で、恩人であり育ての親でありそして、師匠でもある

ちなみに俺を捨てた父親の弟だから俺の伯父なんだけど「おじさん」と呼ぶとさつきみたいにキレル……今年で39歳のくせに

「まったく、最初からそう呼べばいいんだよ」
「ははは…」

「おはようゼノ」
キッチンから女性の声が聞こえる

「おはよう母さん」

この人は「ミランダ・アルフレイン」ジンの奥さんで俺の育ての親。
よそ者の俺を快く受け入れてくれた頭が上がない人の一人だ。

「まったく、オレのことは今だにおじさんのくせにミランダには母
さんかよ」

「いや、でも父さんって呼ぶとたまに怒るじゃん」

「オレが？んなことはない。だからちゃんと父さんと呼べ。」

よくいうよ…まあいいや早く席につこう。と思ったら小さめの影が
背後から突貫してきた。

「おはよう！ゼノにいい！」
「グボア」

やべ、変な声でた…

「おはよう…、朝から元気だねミリア」

この少女の名前は「ミリア・アルフレイン」元々この家の娘で今年で12歳、五年前俺がこの家に引き取られて以来俺のこと兄としてつてくれている

俺にとっては可愛い妹だ。…元気すぎるけどな、まあいいけど

「え〜と、ところでミリア…」

「なあ〜に？」

「そろそろ離れ「いや！」…いやそう言わずに」

！！ 前方から凄まじい殺気が！

「おい小僧、齒あ食いしばれ。」

「いや、あのと、父さん？」

「誰が！『義父』さんだ！」

「ちよっ！さっき自分で呼べって…！」

「問答無よ「ゴス！」」「ドサッ

「さあご飯にするわよ」ミリア、そろそろお兄ちゃんを離してあげなさい。」

「はあ〜い」

母さんの手には角に血糊が付いたまな板がぶらさがってた…まあいいけど…

「それにしても二人共今日から王都に行っちゃうのか……寂しくなるわね。」

「うん……俺も今回ようやく編入試験に受かったからね。」

そうだった、今日から王都にある魔法を学ぶための学校「王立第一魔法学園」に通うために王都に旅立つんだった。

魔法とは、体内に眠る魔力を用いて発動することができる術のことで魔術ともいう

そして魔力とは、生物が持っている生命エネルギーのことで、これが多いほど強力な魔法が使いやすいのである。ちなみに魔力の総量は修行することによって増加させることができる

閑話休題

もちろん魔法の才能が乏しい俺にも魔力は存在するため、簡単な魔法なら使うことができる。はずだ。

ちなみに試験には今までに3回落ちました……

「そついえば学年はどうなるの？まさかふたりとも同じ学年？」

「違うよお母さん、あたしが中等部の一年生でゼノにいが高等部の一年生だから別々だよ。……残念ながらね」

「？最後ボソボソと何か言ったか？」

「べ、べツになんにも！」

あきらかに怪しいな…。まあいいけど

「あらそうなの。でもいきなり高等部から大丈夫なのゼノ？」

「心配いらないよ。むしろ高等部から受けに来る人だっているぐらいだし。」

「まあそれにオレが五年間も鍛えてやったしな♪ガツハツハ！」
と父さんが笑いながら続けた

ていうか父さん…いつの間にリカバリーしたんだ？

「でもゼノには勉強できないからあたし心配だなあ…。」

いや妹よ、ハッキリと言い過ぎじゃね

ていうか妹に勉強の心配されるって……………まあべつに…いやよくないか。

「まあ勉強できないのは認めるけどその分は実践科目で補うよ。」

「でもゼノには魔法も苦手じゃん！」

…なんだろう、妹は俺のことが嫌いなんだろうか？

「ここらこら、ミリアそのくらいにしなさい。お兄ちゃんが困ってるでしょう。」と母さんが割って入ってきた

ていうか母さん、あなたが心配とか言い出したのが原因なんだけど…。

俺は軽いため息を吐きながら荷物をまとめて部屋に戻った。

1話 五年後（後書き）

ご意見、ご感想をお待ちしています。

2話 第二の故郷（前書き）

学園までまだまだかかりそうです。

2話 第二の故郷

ここは「クローゼ村」、周りを樹海に囲まれた「大国アトモス」にある古びた村である。

その村の入口にたくさんの村人が集まっていた。

「それじゃあゼノ、気をつけて行ってくるんじゃよ。」

「はい、村長！」

「ところで、ミリアは何処にいるのかの？」

この老人はクローゼ村の村長、村人皆に好かれているおじいちゃんである。

「ミリアならそこで友達と話してるよ。」

と、ゼノが指を指した方では、ミリアが同年代の女友達に囲まれ別れの挨拶を交わしていた。

「ゼノ君！王都に行ったら気をつけるんだよ！知らない人について行っではいけないからね！」

「うん、ありがとうお兄さん」

「オッス！ゼノ、お前がいなくなると狩りが忙しくなっちまいな。」

「うん、ゴメンおっちゃん」

「ハッハッハ！！そんな気にすんな！それにしてもたった五年であの『どヘタれゼノ』がこんなに立派になりやがるとはなあ。」

「こら、あんた邪魔だよ！！さつさときな！！！！ゼノ、つらい事があっても挫けるんじゃないよ。それからミリアちゃんのことをしっかり守るんだよ！」

「わかりました、おばさん。：それからもう少しおじさんに優しくしてあげてね。」

（本当にこの村の人はいい人ばかりだ！

よそ者の自分をあたたかく迎え入れてくれただけじゃなくこんなに別れをの言葉をかけてくれるんだから。）

「そろそろ出発します。準備をしてください。」

と学園行き魔動車の運転手が告げた。

ちなみに「魔動車」とは、百年ほど前に馬車に代わる交通方法として発明された魔力で動く馬要らずの馬車である。利点として、交通速度なら馬車よりも格段に速く、さらに馬の休憩も必要としないすぐれものである。

ただし、重い物を運ぶことはできないため、行商人などはいまだに馬車を使用している。

ここクローゼ村にも魔動車はあるが、学園行きの魔動車は王都で開発された最新型なので、村のそれとは比べ物にならない性能なのである。

ちなみにクローゼ村のような王都から遠くの村や町にいる生徒にはこのように王都から迎えがくるのである。

閑話休題

「それじゃ、ミリア行こう!!」
「うん!」

「ゼノ、ミリア、体につけるのよ?」

「まあアレだ!二人共楽しんでこい!」
「はい」
「はい。」

ゼノとミリアはミランダとジンにそう返した。

「それじゃ行ってきます!」

こうして二人を乗せた魔動車は王都を目指して出発した。ゼノ

の第二の故郷をあとにして…

「ところで、わしらは名前すら紹介なしなのかのう…?」

……………こうしてゼノは第二の故郷を旅立った。

3話 魔動車にて（前書き）

ようやく適正属性についての説明が書けました。

3話 魔動車にて

Side:ミリア

あたし達がクローゼ村を出発してから4日目。

いつも日が沈む前に近くの町で宿をとっているから、夕方の僅かな時間だけけど、あたしは3日間ゼノにいと一緒に町を探険したり、お店をまわったりして過ごしていた。

その間ゼノにいと腕を組んで歩きまわった。あたしにとってはちょっとしたデート気分だった。

そういえば、途中ですれ違う人達がたまに、ゼノにいのことを見て小声で「ロリコン」って言ってたけど、どういう意味なんだろう？聞こえる度にゼノには「兄妹です！！」って叫んでいたけど…。

それから、泊まった宿は三つ共すつつつつごく大きな宿だった。運転手さんに聞いてみたら「魔法学園に遠くから通いに来る生徒のために、学園側が事前に予約をとっているんですよ。」って言うてた。

そんな感じで王都までの道のりを過ごしていたんだけど…

「なあ運転手さん。」

「なんでしようかゼノ君。」

「王都には後どれくらいで着くんのだ？」

「またですか…。そうですね、おおよそ3時間ぐらいで着きますよ。」

「ううゝ！退屈過ぎる…。」

今日は朝からゼノにはこんな感じで落ち着きがない。最初の頃は魔動車の窓から景色を見てハシャイでいたのに…。どうやら4日目の最終日に飽きたらしい。

「もゝ、うるさいよゼノにいゝ！」

「ゴメン、でもこうヒマだとどうにも。」

「どうせなら教科書読んで予習してなよ。」

そう言いながら、あたしはカバンから教科書を取り出して、ゼノに差し出した。

「こんな難しいもの読めねえよ…。」

いやゼノにい、いちおうこれ中等部用だよ…。

あたしは仕方なく自分で教科書を読む事にした。

~~~~~

「解説！！はじめての魔法学」

魔法とは、体内に眠る魔力を用いて意図的に引き起こすことの出  
来る奇跡である。

誰にでもそれぞれが得意とする属性が存在する。この属性のこ  
とを『適正属性』という。

## 第一章

### 第一節 適正属性

適正属性とは、簡単に言うと魔術師個人に最も適した属性のこ  
とをいう。ここで忘れてはいけないのは「適正属性以外の属性も、  
簡単な魔法なら使用することが出来る」ということである。日常生  
活で使われている魔法の多くは、誰にでも使うことが出来る。

つまり、魔術師は適正属性の魔法しか極めることは出来ないが、  
ある程度なら他の属性も使うことが出来るのである。

### 第二節 属性の種類

魔法の属性は大きく分けると5種類ある。

「火属性」

主に火を扱う属性であり、細かく分けると、熱と炎などが  
分類される。

「水属性」主に水を扱う属性であり、氷や霧、そして怪我を治す治

癒魔法などが分類される。

「樹属性」

主に自然に関係する属性であり、風や樹、そして毒魔法やそれを治す医療魔法などが分類される。

「雷属性」

主に電気を扱う属性であり、雷や磁力などが分類される。

「地属性」

主に物質に関係属性であり、地や鉄、そして錬金術などが分類される。

以上の5種類が五大属性と呼ばれる、魔法の基本である。

~~~~~

そこまで読んであはしは本を閉じた。

「うーん、やっぱり魔動車の中じゃあ集中して読めないや。…あれ？ゼノにいい？」

「……………ZZZ！」

……いつの間に寝てる。

「ふあゝあ、あたしも眠くなってきた。」

今内にゼノにいの膝枕で寝よつと」

Side out

ゼノ達の4日間の旅もついに終わりが見えてきた。

「ほら、二人とも起きてください。」

「ンア……あれ、どうしたの運転手さん？」

ゼノは眼を擦りながら眠そうに運転手に聞き返した

「ほら見てください。あれが王都の名物のひとつ大城壁ですよ。」

「??……!!!!お、おいミリア起きろ、見てみるよ!」

「もう、なんなのゼノにい……?!」

二人の目の前には高さ20メートルにも及ぶ、巨大な城壁がそびえ立っていた。

「スゴい！！横幅もものすごい長い！！」

「きゃー！スゴい！スゴい！スゴい！」

「王都全体を囲んでいますからね。ちなみにゼノ君が住んでいたクローゼ村が軽く100個は入りますよ。」

「ええええ！！そんなに広いんですか？！」

「もちろん！王都内には学園以外に、もたさんの施設や住民の居住区、そして宮殿がありますからね。」

「そうか、そういえば王都なんだから宮殿があつて当たり前か…いや、でもさすがに100個つて……。」

「まあ、クローゼ村はあまり大きな村では無いですからね。とてもあたたかみのある優しい村ですが……。」

と、運転手は続けた

ゼノは少し照れながら笑った。

「スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！スゴい！」

「おーい！ミリアー！そろそろ落ち着こうな……。」

すっかりしてるようでもミリアはまだ12歳の少女なので、始めての王都にハシャイでいた。………まだ外壁なのに。

- - - - -

そうこうしているうちに、魔動車は城壁にあるひとつの巨大な門の前にたどり着いた。

「はい、じゃあ次の方どうぞ。」

鎧に身を包んでぶしょうヒゲを生やした門番が気だるそうに告げた。

「やあビス！調子はどうだい？」

運転手が親しげに門番に問いかけた。

「よお、誰かと思ったらマルコじゃねえか！ってことは乗っているのは学生さんかい？」

門番のビスはやはり親しげに運転手のマルコに返した。

………ちなみに、ここまで頑なに「運転手さん」で通してきたが、そろそろ扱いずらくなってきたため諦めて名前を付けた。

閑話休題

「ああ、だから手続きのほうを頼むよ。」

「任せとけ！…よし、そんじゃボウズそれから嬢ちゃん、入学証明を見せてくれねえか？」

門番のビスはゼノとミリアに問いかけた。

「ハイ。えっと……あつた！これでいいですか？」

「おうバッチリだ！そんじゃ…ほら、こいつが許可証だ！」

そう言つて、ビスはミリアに腕輪を差し出した。

「次からこいつを見せてるだけで門を自由にくぐれるからな。くぐれも無くすなよ。」

「ハイ！……ところでゼノに何してるの？」

ミリアが問いかけると……

「……ヤバイ、入学証明忘れて来た……。」

と真っ青な顔でゼノが答えた。

「ちよっ！どうするのゼノにい！入学式明後日だからもう間に合わないよ！」

「ヤバイ！マジでどうしよう！このままじゃ父さんにシバき倒される！…いや待てよ、今回はかりは母さんまで参戦してくるかも！」

「いやいや、心配する所が違うんじゃないかな？」

マルコが苦笑しながらつつこんだ。

「落ち着けボウズ。アレだ、身分を証明出来るもんがありやあなんとかなる。」

「本当ですか！…ってかホントに！…！」

「ああ、毎年オメエみたいな奴が必ずいるからな。此方も救済措置ぐらい用意してる。」

ゼノは急いでカバンを漁ると中から一枚の金属製のカードを取り出した。

「じゃあこれで！…！」

「だから落ち着けって…。おお、『ギルドカード』じゃねえか。」

ギルドカードとは、冒険者がギルドに所属していることを証明するカードで、個人の名前やレベルが記載されている。

ギルドやレベルについての説明はまたいずれ。

閑話休題

「ボウズ冒険者だったのか？どれどれ………！！！」

「…あ、あの…何か問題でもありましたか？」

ゼノが恐る恐るきいてみると

「……い、いや大丈夫だ！えっと名前は『ゼノ・アルフレイン』だ、な、え」と……お！ちゃんと名簿に名前が乗っているな」

「そんじゃあ…ホレ、ボウズの分だ。ところで……」

ビスは腕輪を渡しながらゼノに問いかけた。

「学園に通っていた訳じゃねえのに、なんでギルドに冒険者登録してたんだけ？」

「べつに大した理由じゃないですよ。故郷がド田舎にあるから、冬の間はそれぐらいしか稼ぐ方法が無いんですよ。あと修行も兼ねて…ていうか学園とギルドって何か関係あるんですか？」

「ああ！授業の一環としてギルドでクエストを受けてるからな。もつとも、高等部からだが。」

「さてと、ボウズその腕輪絶つつつ対に無くすなよ！」

「うっ、わかりました……」

こうして一行を乗せた魔動車は門をくぐっていき、ようやく王都への旅に終わりを告げた。

走り去っていく魔動車をビスは眺めていた。

「あの灰色の髪の人にあのギルドカード、……あれが噂の『牙折り』か。」

門番の呟きは風に流されて空に消えていった。

3話 魔動車にて（後書き）

王都到着。……………何時になったらヒロイン出てくるんだろう。

4話 王都到着

ゼノとミリアは、運転手のマルコに別れを告げ、学園を目指して歩いていたが――

「それにしても……スゴいね。」

「ああ、ものすごい広いな。……で、ここは何処だろう?」
――さっそく道に迷っていた。

ここ「王都アトランド」は、大国アトモスの南部にあるこの国最大の都市である。

都市内は北、南、東、西、そして中央の五つの地区で成り立っている。

ちなみに第一魔法学園が在るのは西である。

ゼノ達は、北の城門から王都入りしたため、現在北地区にいるのだが

「えつと、向こう側が西地区のはずなんだけど……建物が邪魔で進めないし」

彼等がいる北地区は、商人や冒険者がよく訪れるため、あらゆる店や宿が密集しており、迷宮と化していた。

ちなみに冒険者ギルドもここ北地区に居を構えている。

「ゼノにい…お腹すいた……」

「そういえば、昼飯はまだだったか？
しょうがない、その食堂でメシにしよう。」

ゼノは近くに在った、少し大きめのキレイな食堂を指差したて言った。

- - - - -

カランコロン

「いらっしやいませ！何名様ですか？」

店に入ると同時に、ポニーテールの女の店員が笑顔で訪ねてきた。

「え、えゝと に、二名です…「ただいまカウンター席しか空いて
ませんがよろしいですか！」

「ハ、ハイ「それではこちらの席へどうぞ!!」「……」

二人は店員の勢いにおされながらもあとに続いた。

「いらっしやいませ。ご注文が決まったらこちらへお声をおかけください。」

カウンター席に座ると、正面からダンディな男の店員が声をかけてきた。

「すみません、その前に少し聞きたいことがあるんですが良いですか？」

「ええ、かまいませんよ。」

ダンディな男は渋い声で答えた。

「えっと、第一魔法学園に行きたいんですけど道に迷ってしまってます……。よろしければ道をききたいのですが……。」

「なるほど。王都に来たのは始めてですか？それなら「あれ！君達魔法学園の生徒なの！？」

ゼノとダンディが会話をしていると、先ほどの店員が勢いよく割り込んできた。

「ええ。先ほど王都に到着したので学園に報告に行こうと思っていて……。あなたも第一魔法学園の生徒なんですか？」

「もちろん！ 明後日から高等部の2年になるのよ！」

ゼノの問いに店員は元気に答えた。

「それならスズカさん、もう少しで今日のバイトは終わりですし、彼等を学園まで案内してあげてはどうですか？」

ダンディはエエ声芸人並の渋い声色でそう提案した。

「そんな！ さすがにもうしわ」それはいい考えね！そうしまし
う！」「け…な…い？」

スズカと呼ばれた店員は即断した。

「いえ、でも「いけない！注文が入ったんだっ！ それじゃまた
後で！！」…いつちゃったよ。」

「お腹すいた……。」

さつきからまったく会話に参加してなかったミリアが呟いた。

- - - - -

「「ごちそうさまでした！！」」

「それではお会計は合計1000Gゴールドです。」

ゼノは財布から500と書かれた金貨を二枚取り出した。

「それでは、ちょうど1000Gいただきます。 ありがとうございます
いました。またのご来店をお待ちしております」さあ！それじゃ行き
ましょう！！ お疲れさまでしたバイトリーダー！！」「…お疲れさ

までしたスズカさん。」

「言わせてあげよう！―あと一文字ぐらい言わせてあげよう！―」

ゼノは腹の底から声を張上げてツツコミをいれた。

「…あのおじさん、バイトだったんだ…。」

ミリアはボソツと呟いた。

5話 学園まで（前書き）

ようちんく学園に着きます

5話 学園まで

Side:ゼノ

食堂を出てから俺達は、北地区の『ゲート』に向かっていた。

そもそもクローゼ村の100倍以上の広さの王都を、歩いてまわるのは無理があるそうだ。……冷静に考えればたしかにそうだ。

そこで都市を行き来するために用いられるのが、「魔術式転移門」通称『ゲート』だそうだ。

「ゲートは大昔に存在したと言われている『時空間魔法』の研究中に偶然実用化に成功したという、王都が誇る大規模魔法陣なのよ！」

と、さつきスズカさんに質問してもいないのに説明された。

しかもドヤ顔で……けっこうイラっときた。

「ゲートはそれぞれの地区に3つあって、それを使って都市内それぞれの地区に行くことが出来るのよ！」

と、ドヤ顔のまま続けてきた。

どうでもいいけど毎回あんな大声をだして疲れないんだろうか？

そして現在――

「ほら！あそこの店が雑貨屋でそっちの店が防具店よ！！ あ、心配しなくても西地区に行けばもっと可愛いお店もあるからね！！今度いっしょに行こうねミリアちゃん！！」

「あの…その…あうう…」

- - 妹が、ものっそい勢いで絡まれてます。
どうしてこうなったんだっけ……？

く回想中く

「それじゃ！まずは自己紹介から！私はスズカ！スズカ・イスルギよ！出身は東国の大和！《杖》はこの扇子！それから…」

と、やはりこっちが何か喋る前に、一方的に情報をぶちこんできた。

「…で！趣味は…！あと…は…で！そういえば最近…」
「もう大丈夫です！！」

「そう？ まあ私だけが話しててもしょうがないもんね！」

すでに十分過ぎるぐらいにしゃべくり倒してんだろっか！！！！

と内心思っていたけど

「ええ、そうですね。」

この時まったく態度に出さなかった自分を誉めてあげたい。

「ゼノ・アルフレインといいます。 明後日から高等部の1年になります。」

「じゃあ私の方がお姉さんなんだ！ 『スズカお姉さん』 って呼んでねー！」

「いえ、さすがにあれなので遠慮させていただきます。」

「そ、そう……。 」

あれ？ ちよつとへこんでる？

「まあ、そこはこれから話し合っていけばいいか……。 」

そこは諦めてくれ！

「えつと、じゃあスズカ先輩で。」

「先輩？ そつか先輩か… それもいいわね！！ これからは私のことをスズカ先輩と呼んでいいからね！」

復活しやがった…。 まあいいけど…。

「それじゃ早く続きを聞かせて！」

止めたのはあなたです。

「そうですね…… 出身はアトモスのずっと北の方にあるクローゼ村

です。えつと……以上です。」

「えゝそれだけ！？もつと趣味とか教えて！ねゝ」

ねゝと言われても…

「…ちよつとあなた、いい加減にしてください！！ さつきから
ゼノにいつきまとして！何なんですか！？」

「こらミリア、そんなに怒らなくてもいいだろう…。」

妹よ、よく言った！

「うつ、 うん…ごめんなさい…」

ミリアはしょんぼりして謝った。

「！！…か、かかか…」

あれ？どうし「カワイイ」！！ なにこの娘！スッゴクカワイイ
！！」

「「え？」」

「お名前は！？」

「ミ、ミリア・アルフレインです…。」

「今何歳！？」

「えつと、12歳で…。」

「じゃあ中等部の1年生になるんだ！！」

「あの、はい…。」

「私のことは『スズカねえ』または『ねえね』って呼んで!」
「それはちよつと……」
「好きな食べ物は!? それから……」

〈回想終了〉

〈side out〉

何故かミリアのしょんぼりした姿と、その前のゼノ「にい」という言い方がツボだったらしい。

「いいこと思いついた! 今度私の部屋に遊びにおいでよ!」ミリアちゃんに似合いそうなカワイイ服がいっぱいあるから!」

「そつえば先輩、ゲートって始めてなんですけど、どんな感じですか?」

さすがにミリアが心配になり助け船をだすゼノ

「え! そつね…それは見てのお楽しみかな! もうすぐ着くから楽しみにしててね」さあ行きましょう!」

なんとか救出に成功したようだ。

「……ミリア、今度から人前では兄さんと呼ばうな?」

「わかつたゼノに……お兄ちゃん。」

兄妹は約束を交わした。

そんなこんなでゲートに着いた三人

そこには地面に巨大な魔方陣が3つ描かれていた

「ほら！あの魔方陣がゲートよ！ゲートは30分に一回のペースで起動するようになってるのよ！」

「へー、それにしてもすごい人の数ですね。」

「もうすぐ午後5：30だから東地区の居住区に行く人がほとんどだけだね！」

「あれ？でも真ん中の魔方陣だけ人が少ないね。」

「んふふふ♪ よく気付いたね！二人共気をつけてね……」
スズ力は珍しく少し引き締まった表情で説明した。

「……南地区は貴族街だから貴族や一部の商人以外立ち入り禁止なのよ……」

「へえー、なんで南地区に貴族が集まっているんですか？」

「それはね！……えっと、あれ！？ねえ、なんだったつけ！？」

ゼノの質問に、スズ力は何故かミリアに答えを求めた。

「えっ！ いや、あたしに聞かれても…。」

「ということだからゼノ君！ ごめん♪わからないや♪」

この時ゼノはいまさらだがふと思った…。

（この人メンドクセー）

無駄話をしているうちにいよいよゲートの起動時間になった。

ゼノ達がいる西地区行きのゲートはそれほど人がいなかったが、2
つ隣の東地区行きのゲートはとても混雑していた。

「もう少し摘めてください！」「いでっ！ てめえ何ひとの足踏んでんだ！」「ちよつと！ あんた今私のお尻触ったでしょ！！」「えっ！？ 違う！ 僕じゃない！ 本当だ信じてくれ！！」「……！！ゼ！ いでっ！ てめえ！！ 今度はスネを蹴りやがったな！！」「それでは…ゲート起動！！」

次の瞬間、広場は静寂に包まれていた。

いや、広場自体が変わっていた。

「到着……！ さあ学園を目指しましょう！ 学園までは真っ直ぐだ

から迷う心配は無いけどね！」

「いやいや！ちょっと待ってください！今なにが起きたんですか！」

「一瞬であの人達居なくなっちゃった…。」

狼狽える二人に対して、スズカは――

「ああ、大丈夫だよ！西地区のゲートに移動しただけだから！」

と告げた。

「あんな一瞬で？」

「これが王都か…。」

と、よくわからない結論をだす二人だった。

――

「さあ、着いたよ！ここが第一魔法学園よ！」

目の前には石造りの巨大な建物が建っていた。

「――すげえ…。」

「――王都に着いてまだ数時間しか経ってないのに……一生分驚いた気がする。」

田舎育ちの二人にとって、学園はものすごい迫力があつたようだ。

「後はその受付のおばさんに聞いたら学園と学生寮までの地図をもらえるからね!!」

「あっ!はい、わかりました!」

「どうもありがとうございます。」

「どういたしまして! 何かあったら何時でも頼ってね!それじゃ!またね!」

そう言うとスズカは去っていった。

「悪い人では無いんだよね……」

「疲れるけどな……」

二人はそう呟いて、その背中を見送った。

6話 Another side

Side:????

~~~~~

『本当に行っちゃうの?』

『でも!』

『もう1つ約束して...』

『絶対にいつかわたしに会いに来て。』

~~~~~

………今のは？

そうだ、あの時の――

「――夢？」

わたしは寝ぼけ眼を擦りながら、部屋中を見渡した。

「ここは？」

えっと……そうだ、思い出した。

ここは王都アトランドの東地区にある学生寮だ……

故郷のハング村から三日かけて、昨日の昼間に王都に着いたんだっ
た。

「ハング村か……」

わたしは自分の故郷のその村が大嫌いだ。

小さい頃、わたしは周りの子供と比べて魔法の才能があった。

5歳の時に適正属性を調べたら属性が3つある事がわかった。

6歳の時にはすでに基礎魔法が使えるようになっていた。

わたしが周りの子供から爪弾きにされたのはその辺だった。

誰もわたしと会話をしようとしなくなった。その内、目も合わせて
くれなくなった。

それどころか酷い時は化物と言われることもあった……ただ一人を
除いて……

そのくせ、3年前にわたしが第一魔法学園中等部の受験に受かったら周りの態度は一変した。

それまでわたしを除け者にしてた村の子達は途端にわたしに集まってきた。

正直、気味が悪かった。自分のことを打算的な目で見られている気がした……あの人がいたらきつと心の底から喜んでくれたんだろうな…。

「やめよう、朝から…。」

どうやら昔の夢を見たせいで嫌なことを思い出しちゃった。

「さあ、今日も1日頑張ろう!」

まあ、学園が始まるのは2日後だけだね。

ガチャ――

ドアが開く音がしたから見てみると、そこにはさっきから姿の見えなかったルームメイトがいた。

「おはよう! ナズナちゃん!」

「おはよう。もう昼だけだね。」

「えっ、うそ！」

わたしは慌てて時計を確認した。

「ホントだ！もう何で起こしてくれなかったのお母さん！？」

「いや、誰がお母さん？」

- - - - -

わたしは北地区にある「オルディンの武具屋」に向かった。

- - バタン！

「おはようお爺さん！」

「うるせえぞ赤頭！！もつと静かに入れ！！それから世間ではすでに『こんにちは』だボケ！」

この、王都では珍しい着流しを着たお爺さんは《杖師》のオルディンさん、アトランドの知る人ぞ知る名物職人 - -

「誰が名物だ！！」

- - もとい名職人

「まったく、久しぶりに顔を合わせたと思ったら……それに若いくせにこんな時間まで寝やがって……」

「そ、そんなことないですよ………？」

「その『?』は何だ?……まったく、寝癖ぐらい直してからこい。」

オルディンさんは羨望の眼差しでわたしの赤い髪の毛を見ている。

「何適當なこと言ってたんだ!! 呆れてんだよクソガキ!!」

「そんなことよりオルディンさん、頼んでいた《杖》は?」

「このっく!! ったく! ちよっと待ってる」

そう言うオルディンさんはカウンターの奥へ入って行った。

「ここで《杖》について説明すると、《杖》とは魔術師が魔法を使用する時に使う道具の総称のことで、昔は全て杖を使用してたからその名残らしい。

今では、魔術師個人によつて使用する《杖》は異なり、人によつては剣や盾を《杖》として使用している場合もある。」

「……で、誰に説明してた?」

いつの間にかオルディンさんは戻って来ていた。

「いや、退屈だったからつい。」

「……とにかく、ほら! オマエさんの注文通りの仕上がりだ。」

そう言いながら、オルディンさんは木製の長杖を手渡してくれた。

「柳の枝を削って作った一品だ。クセはあるが、まあオマエさんなら大丈夫だろう。」

「ありがとう！」

「なあに、構わんさ。今年からギルドでクエストを受けるんだろう？また何か必要になったら何時でも注文しにこい。前払いしか受け付け無いけどな。」

「うん！それじゃ！」

「オウ！」

わたしはオルディンさんに別れを告げて店を出――

「あ、その前に」

――る直前で、さっそく新しい《杖》で風魔法を使って寝癖をなおした。

「……もっとマシな使い方をしろよ。」

――

わたしが上機嫌で店を出ると――

「これはこれは、ルミールさんではないですか。」

突然ギザッたらしい口調の青年が話しかけてきた。

「……何か用かしら？」

こいつはシムジウ・ハング、名前から解るようにハング村の出身で、
ついでに村長の孫だ。

「いえいえ、偶然見かけたので挨拶をと思ひましてね。」

シムジウは不愉快な声で続けてきた。

「どうもご機嫌がよろしいようですね？」

あんたに声をかけられるまではね……

「貴方には関係ないでしょう？」

わたしは冷たく、そう言った。

「おや、その長杖は？まさかとは思いますが、またあんな小汚い老人の店で購入したのですか？」

「それがどうかしたのかしら？オルディンさんはとても腕のいい職人よ。」

「冗談でしょう？この僕の依頼を断るような老人ですよ？」

「あいにく、オルディンさんは客を選ぶのよ。」

「ふん、この天才の僕以上にふさわしい客がドロにいると言った
い？」

誰が天才なんだか…… 3年前に学園に受かる前は散々わたしのことを
化物と罵っていた癖に。

「たくさんいるわよ。…それに貴方以上の実力を持っている人はも
つというわ。」

実際にこいつは学年で中堅程度の実力だし、そのうえ今年から高等
部になるから人数は倍近くになるというのに。

「っそんなもの！僕の才能が目覚めるまでの間だけだ！」

なにそれ？新しいギャグのつもりかしら？

「…コホン、失礼しました…。どうですか？お詫びにこれから一
緒に食事でも。」

「遠慮しておくわ、さっき食べたばかりだから。」

「そうですか。それもそうですね、もう4：30ですしね。」

「それじゃあさよなら。」

わたしはそう言い放ってその場を後にした。

……というかもう4：30だったんだ。朝も昼も食べてないからお
腹すいた。

- - - - -

「ここにしようかな。」

わたしは「喫茶アルバトロス」と書かれた扉を開こうとして・・

『あれ！君達魔法学園の生徒なの！？』

(……今の声は)

『もちろん！ 明後日から高等部の2年になるのよ！』

踵を返してその場を立ち去った。

うん、別の店に行こう！

- - - - -

「……た、食べ過ぎた。」

わたしは呟きながらゲート向かった。

起動まで、あと少し。

あの後近くの食堂で遅めの朝食兼昼食を食べた。あの自称天才との

会話のせいでストレスがたまってたからヤケ食いしてしまった。
体重は……大丈夫だよな？朝は食べてなかったし。

そんなことを考えているうちにゲート着いたら――

「もう少し摘めてください！」

――今まさにゲートが起動しそうになっていた。ってヤバイ！

わたしは慌てて魔法陣に駆け込んだ、途中で何かを踏んだり、長杖が誰かにぶつかった

「いでっ！てめえ何ひとの足踏んでんだ！」「ちょっと！あんた今私のお尻触ったでしょ――！」

ヤバイ、大事になってる……

わたしは気まずくなり目をそらした。

その時ふと、西地区行きの魔法陣が目に入った。

「――！！！」

あの灰色の髪の毛は――

「ゼノ――！！！」

わたしは咄嗟に叫んだ。けど……

「それでは……ゲート起動――！！！」

その直後魔法陣が淡く光り、一瞬で東地区に移動していた。

「警備員さん！！この人痴漢です！！」「なっ！！だから違っ！」「うるさいわね！！犯人は皆そう言うのよ！！」「さっきからうっせえぞそのババア！！心配しなくてもてめえを触るゲテモノ好きなんざ居ねえよ！！」「何ですってー！」

見間違えたのかしら？……でも、もしかしたら…。

それはともかく…

「ごめんなさい。わたしの長杖が当たっちゃったみたいで…」

とりあえず誤解を解いておこう。

- - - - -

「はあ…。」

あの後、次のゲート起動で西地区に行き、1時間近く探し回ったけど結局見つからなかった…。

「はあ…。」

わたしはもう一度ため息を吐いた。

やっぱり見間違えたんだ…。

わたしは寮に帰り、部屋のドアを開けた。

「お帰りサラちゃん！もう、遅いから心配したよ〜〜〜！」

わたしはナズナちゃんに謝ってからベッドに倒れこんだ。

今日は疲れた。

6話 Another side（後書き）

6話目にしてやっとヒロインをだせました。

ぜんぜん再会してないけど……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8444y/>

～ 碎牙 ～

2011年11月30日18時52分発行